
平等エレベーター

シュール

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

平等エレベーター

【Nコード】

N4154F

【作者名】

シユール

【あらすじ】

岩田幸三は常日頃から思っていた。エレベーターは平等じゃない。
。。。

岩田幸三（41）はため息ばかりついていた。

やはりおかしい・・・。

「部長、誠に申し訳ないですが、お昼からお休みを頂けないでしょうか」

半チャン定食のネギを前歯につけたまま部長は「いいよ」と言っ
て臭いげっぷを幸三に向かって一発吐いた。

自宅マンションにつくと妻の光江は「なにしに帰ってきたの」と
言っ
てネット販売で買った一つ三百円もする期間限定“魔法のシ
ュ
ークリーム”をテーブルの下に隠した。

「どうしても気になることがあって」幸三は炊飯器の中の冷たくな
ったご飯を口の中に放り込むと「ちよつと行ってくる」と言っ
て帰
ってきたばかりの自宅マンションを出た。

出たといつても行先はマンション一階のエレベーターホールだっ
た。

1フロアー4軒の11階建て、計44軒が住む幸三のマンション
にはエレベーターが1機あるだけだった。

平日の昼間だけあってエレベーターはそんなに忙しくは動いてい
なかつた。

宅急便屋のおにいちゃんや学校から帰ってきた小学生がたまに乗
つたり降りたりする程度だった。

10階で止まっていたエレベーターが動きだした。

9・・・8・・・7・・・何気なくのボタンを押した。

いい感じで降りてきていたエレベーターが3階で止まった。

暫くしてエレベーターはまた動きだしやがて幸三の前で大きな口
を開いた。

中には自転車にまだ2歳くらいの女の子を乗せた主婦が乗ってい

た。

B1階にはスロープがあり自転車に乗った住人は皆B1階で降りた。

「すみません」と言っけて乗り込んだ幸三をその主婦はげげんそうな目で見た。

そして、B1階で「お先に」と言っけて降りたときも恐い顔をして幸三を睨んだ。

「やはりそうだ」幸三は呟くと携帯電話を取り出し部長個人の携帯の番号を押した。

「なんだよ、休むといたり相談があるといったり…」長年の煙草のヤニが溜まつて赤茶色くなつた歯を剥き出しにして部長は幸三の顔を見た。

「申し訳ありません、いえ、実は私前々から思っけておつたことなんですが……」

二十分後話を終えて会議室から出てきた部長は「あいつ一体何考えてんだよ」と独り言を言っけて頭をかいた。

幸三は同じマンションの5階に住む現在の管理組合の理事長である橋本光明(36)の自宅の扉を日曜の朝早くに叩いた。

橋本は、いつたいなんだよといった顔をして扉の向こうから出てきた。

「私、このマンションの8階で住んでおります岩田と申します」

主婦同士でもほとんど付き合いもない昨今のマンションの近隣事情なのにましてや夫連中などは相手の顔を見たつてどこのどいつかわからないのが現実だつた。

「朝早くから誠に申し訳ございません」幸三は言いながら会社の名刺を差し出した。

名刺には“株式会社 東西エレベーター”と書かれていた。

「いえ、実は……」

二十分間、玄関で幸三の話を聞いた橋本は「おい、ビールないかビール」と言つて冷蔵庫からきんきんに冷えた500mlの缶ビールを取り出すとカラカラになった喉に一気に流し込み「あの人いたい何者なんだよ」と言つてまだ明けたばかりの空を一羽だけ飛ぶカラスの姿を窓越しにじつと眺めた。

東西エレベーター本社では毎月第一月曜日の朝9時から、技術社員が集まつて自分たちが日頃から感じている疑問や新しいアイデアなどを発表する会議が開かれる。

もちろん9月の第一月曜日の朝9時に開かれたその会議に岩田幸三は出席していた。

幸三は課長補佐だった。

自分より若いまだ何の肩書も付いていない社員が一通り発表を終えた後、幸三の順番がやつてきた。

今日の会議のトリだった。

「私、常日頃より疑問に感じていることがあります……」

幸三のこの声を聞いた途端、部屋の隅で居眠りしていた部長は突然起きだし「すまんが俺急用を思い出したから」と言つて逃げるようにして会議室を出て行った。

「それでは続けさせていただきます」幸三は咳払いひとつすると昨日の自分の自宅マンションでの出来事を話した。

「おかしいと思わないですか？」幸三の自信満々のこの台詞で、二十人ほどの出席者のうち約半数が、「こいつ何者じゃ？という顔をした。

「明らかに私のほうが先にエレベーターのボタンを押しているんです。

小さなマンションですから1階下のB1のエレベーター前に誰か来たなつてというのが人の話し声や自転車が出す音でわかるんです」

幸三は昨日の朝起きて一階のエレベーターホール兼エントランスにある郵便受けに朝刊を取りに行っていたのだった。

「エレベーターが下りてきて一人だけ乗っていた住人が降りてきました。」

『おはようございます』と頭を下げている間に扉が閉まるうとしたんです。

だめじゃないか、俺を乗せてくれなきゃ・・・私は閉まるうとした扉にチョップをしてもう一度開けさせ中に乗り込みました。いつもより早く早く閉まるなあと思いつながら8階の“8”のボタンを押したんです。

するとどうでしょう！ エレベーターは下降を始めたんです。

先にボタンを押したのは間違はなくこの私なんです」

この時点で二十人ほどの出席者のうち十七、八人が幸三と目が合わないように部屋の空間に視線を漂わせた。

「驚きはまだ続くんです。」

B1で酒臭いこれまで一度も顔も見なかった朝帰りのどこかの階のおっさんを乗せたエレベーターは上昇を始めたかと思うとなんと1階で止まってしまったんです。そして、ランニング姿の汗臭い初老のおやじが中に乗り込んできました。

さっきまで私以外にエントランスには誰もいなかったんです。明らかにこいつは絶対間違はなく私より後にエレベーターのボタンを押したんです。

そして、皆さんほんとに驚かないで下さいよ。この後とんでもないことが待っていたんです。そ、それは・・・な、なんと・・・エレベーターが8階、そう、私が運んで行ってもらう8階、そこに着く前に2度も止まったんです。3階で酒臭いおっさんが降り、5階でランニングのおやじが降りていったんです。

一番初めにエレベーターのボタンを押したのは間違いなくこの私なんです。

わなわなと怒りで体を震わせていると、信じられないことにエレベーターはまた止まったんです。

地震でもあったのかな、私は真剣にそう思いました。

しかし、地震でもなんでもありません。
ガキが6階から乗り込んできたんです。

そして、あるうことかそのガキは7階でこの私を一人置き去りにして降りていったんです。

一番初めにボタンを押したのはこの私なんですよ。

その私がいちばん最後に降ろされた。

そんな不公平がまかり通っていいのでしょうかっ！」

フリーズ。

「エレベーターってそんなもんなんですよ」一人口を開いたのは、

東西エレベーター創立以来初めての東京大学卒社員、鉄美清隆（2

9）だった。

「少しでも効率よく皆さんを運ぶ・・・それがエレベーター、いえ、言い換えればそんなエレベーターを作るのが私たちの仕事、少し大袈裟に言えば私達に与えられた使命なんです」

鉄美のこの言葉を聞いた幸三はフンと鼻で笑った。

「鉄美君。

君確か東大卒だったよね」

鉄美はしよすがなく「ええ」と首を小さく縦に振った。

「じゃあ“法の下の平等”って知ってるよね。

人間は生まれながらにして法の下において平等に生きる権利を持っているって。

ああー、そうだ、君東大卒だっていったって“ゆとり教育世代”だよな。

こんなことひょっとして習っていない、イコール、知らないんじゃないの」

フリーズ、フリーズ。

「それくらい知っていますよ」鉄美は少しむっとした表情で言った。

「じゃあ、その平等はどこに行ったの？」挑発的に幸三は聞いた。

「岩田さんのおっしゃることはよくわかります。確かに、大変大切なことです。」

結果、私達のマンションの住人の皆さん全員が幸せになれるんです」

言いながら幸三は選挙演説で回る立候補者のように橋本の手を無理矢理握った。

「や、やめてくださいよ、岩田さん。」

岩田さんのお気持ちはよくわかるんですけど、そ、その、何て言いましたっけ？」

「平等エレベーターです」と幸三は鼻の穴をふくらませて言った。

「そ、その平等エレベーターですけど、確かに岩田さんのおっしゃることはよくわかるんですけど、実際に設置されるとんでもないことになっちゃうんじゃないかと思って・・・」

「理事長のおっしゃる通り、設置当初は確かに皆さん戸惑うというか面食らうと思うんです。」

「だけど、ただですわね・・・世の中平等だっていったって何にも平等じゃない。」

格差社会は進んでいくばかり。

せめて、そう、せめて当社が作ったエレベーターだけはお使い頂く皆さんに平等のすばらしさを感じていただきたい。

極論ですけど、民主主義の最後の砦なんです、当社の『平等エレベーター』というのは」

ここまで幸三が言ったとき店主が「すいませんけど12時半までなんで」と申し訳なさそうな顔を二人に向けた。

「わかりました、じゃあ理事長、ファイナルアンサーっ」

「ファイナルアンサーって・・・えらく時代遅れな・・・でなんなんですか？」

「理事長、私達のマンションに当社の『平等エレベーター』を設置いただけるのであれば、こちらの を」と言いながら幸三は皿の上に残った冷えてカチカチになったイカリングを指差した。「そして、いや、やっぱりダメだとおっしゃるんであればこちらの×を」といって、いつの間にか作ったのか、串に刺してあったしし唐をばらして

×の字に重ねたものを指差した。

「そ、そんなこと、言、言われても・・・」

「いえ、だめならだめでいいんです。

理事長の率直な意見をお聞かせ願えればそれで・・・」

「ほ、ほんとうですか・・・」

「ええ、男に二言はありません」幸三は重く首を縦に振った。

「じゃ、じゃあ、こちらで」

理事長が恐る恐るしし唐で作られた×を指差そうとしたとき「ア
ウーっ！！」と雄たけびをあげた幸三はしし唐を手でつかんだか
と思うと口の中に放り込み「イカリング最高っ！！いかのくせして
カタカナで書くなっ！！b~~~~yみのもんたっ！！」と言って、お
魚くわえた野良猫、のように店を出て行った。

「それでは一度試運転を行いたいと思います」

今日は晴れの日、そう、『平等エレベーター』の記念すべき第一
号が幸三の住むマンションに設置される日だった。

「皆さん、朝早くからご参加いただきまして誠に有難うございます」

日曜日の午前七時に幸三の声が一階エントランスにこだました。

「簡単にご説明させて頂きますと、すぐく平等なエレベーターでご
ざいます」

幸三の説明に、寝ぐせだらけの住人が皆、はあ？ という顔を
した。

「各階の呼び出しボタン、上向きや下向きの矢印のボタンがござい
ますよねえ、あれを押しした順番に忠実にこの『平等エレベーター』
は皆様をお運びいたします」

住人の はあ？ が はーいーあ??? になった。

「皆様、こんなご経験があたりではないでしょうか。

このエントランスでエレベーターをお待ちになっていた。

エレベーターは上の階から下りてきたもののあいにく途中の階で
何度か止まりやっこの一階にやってきた。

エレベーターに乗り込みお住まいの階のボタンを押して『閉』のボタンを押そうとしたとき、たまたま他の住人の方がやってこられ、どうもすいません、と言つてエレベーターに乗り込み、『閉』のボタンを押しながら行き先階のボタンを押すと皆様の階より下の階だった。

エレベーターは勿論、後に乗り込んできた方を先に降ろし、それから、先にエントランスで待っていて先に行き先のボタンを押した皆様の階に行き、やっと皆様を降ろすことになる。

おかしいと思いませんか？」

話を聞いていた住人のはーいーあ???がへ!? になつた。「わかりやすく説明しますと、あ、そうだ、理事長、例の、画用紙に描いたこの『平等エレベーター』の特徴を・・・」

「理事長は欠席です」最上階の十一階に住む斉藤さんだつた。

「原因不明の頭痛とかで昨日から寝込まれているらしいです」斉藤さんが続けた。

「そうですか。」

じゃあ、しょうがないですから、実際に何人かの方に乗っていただきましよう。

私が8階ですから、そうだ、最上階の斉藤さん、それと、どなたか私の階、8階より下でお住まいの方と一緒に乗っていただけの方はいませんか？」

幸三の呼びかけに、3階に住む、双子の男の子の父親の石橋徹(32)が「私乗ります」と言つて手を挙げた。

「有難うございます。」

では、みなさん」

幸三は、エントランスに集まつた住人に目を向けた。

「私達三人がこれからこの『平等エレベーター』に乗り込みます。」

8階に住む私はず先に行き先階のボタンを押します。

次に3階の石橋さんが。

最後に最上階の斉藤さんが押します。

どのようにこの『平等エレベーター』が動くかみなさんよく行先表示パネルを見ておいてください」

言うと、幸三たち三人はエレベーターに乗り込んだ。

「それでは行ってまいります。」

ヤマト発進っ！！

さらばー地球よー 旅立ーつ船はー

住人は皆ばかんと口をあけて三人を見送った。

「石橋さん、3階はスルーしますから」

上昇を始めた『平等エレベーター』は幸三の言ったとおり、スピードを落とすことなく本来止まるべきはずの3階をスルーしていった。

「ねっ」と幸三は得意満面の笑みを石橋に向けた。

何が、ねっ、なんだよと石橋が思っているうちに『平等エレベーター』は8階に着いた。

「岩田さん、このエレベーターがだいたいどんなのものはわかりました。」

要は呼ばれた順番に人一人ずつを目的の階に運ぶということですよね？」石橋は幸三に聞いた。

「おっしゃる通りです」幸三は少し胸を張って答えた。

「ですけど、岩田さん、非常に非効率的だと思っんです。」

例えば、朝の出勤や子供たちの登校時に、みなさん1階に降りようと極端な話一斉に各フロアでエレベーターの呼び出しボタンが押されたとします。すると、本来なら2、3回の往復で済むところが1階を除いたとしてもエレベーターは10往復しないといけない。会社や学校に遅れてしまう可能性があるんです」

「これまでより少し早く家を出ていただければいいと思います」サラリと幸三は言った。

「で、ですけど、何て言うか、エレベーターも大変だと思っんです。これまでの何倍も上や下を行ったり来たりしなくちゃいけないですから」

「御心配はいりません。」

普通のよりは頑丈に作っていますから」

「が、頑丈にっついても、そ、それに、電気代だっつてばかになら
ないでしょう。」

「今や世の中は環境にやさしくっつていう流れなのにそれに全く逆行
している形で……」

「環境、環境っつて言いますけど、その環境を悪くしたのは誰ですか？
宇宙人がやってきて排気ガスや二酸化炭素をばらまいたのですか？
違いますよね。」

我々地球人が汚したんですよね。」

それを鬼の首を取ったかのように、我々が初めて環境問題に取り
組みました、先陣を切っつているのは我々です、っつて厚顔無恥をさら
け出している。」

先に謝罪するのがスジでしょう」

『平等エレベーター』が3階に着いた。

「子供の友達がこのマンションの7階にいるんです。」

最近、やっと二人だけでエレベーターに乗っつて行けるようになっ
たんですけど、これだけ上へ行っつたり下へ行っつたりすると子供たち
も不安になるでしょうから二人だけで乗せることは出来そうもない
です」

「平等の大切さだけを教えてあげてください」幸三はっつっけんどん
に答えた。

石橋徹は一瞬むっつとした表情をしたが、扉の開いたエレベーター
を降りると幸三に背を向けたまま「理事長は何階でしたっけ」と言
葉だけを投げた。

「5階です。」

乗っつていきますか？」

幸三が答えると、石橋徹は背を向けたまま「いえ、結構です。ど
うせ、先に11階に行くんでしょ、この『平等エレベーター』とい
う優れ物は。それなら階段で行っつたほうが早いですから」と言っつて、

エレベーターホールのすぐ脇にある階段に駆けて行った。

『平等エレベーター』は再び上昇を始めた。

「岩田さん、あなたは信念をお持ちでいらっしゃる」佐々木さんがポツリと幸三に吐いた。

佐々木さんはこのマンションができた時からの住人で、3年前に奥さんを亡くした。

長年勤めた会社を定年退職で辞め、残りの人生をこのマンションで奥さんと二人仲良く暮らしていく、そう決めて退職金をはたいて買った。

ところが、突然奥さんがこの世からいなくなった。

奥さんが存命の時は、だれも出席しない、年に一回行われるマンションの管理組合の総会に毎年二人肩を並べて出席していた。

このマンションと一緒に暮らしていく、そして、このマンションで、死んでいく、思い入れがほかの住人とは比べ物にならないくらい強かった。

『平等エレベーター』が11階に着いた。

「では、ここで失礼いたします」佐々木さんは軽く会釈をするとエレベーターから降りて行った。

暫く佐々木さんの後ろ姿を見つめていた幸三は行き先表示の1階のボタンを押した。

『平等エレベーター』は再びゆっくりと下降を始めた。

「そういえば、ヤマトの主題歌を歌っていたのは佐々木功だったよなあ・・・同じ佐々木だ」

ポツリと幸三が吐いたとき『平等エレベーター』は5階を通過した。

理事長の部屋の前で、石橋徹が、青白い顔をして立つ理事長に向かって、口から泡を飛ばして何かを熱弁していた。

そして、ちょうど同じころ、最上階の佐々木さんは部屋に戻ってきたかと思うと、奥さんの仏壇の前で手を合わせながら「かあさん、岩田という男、あいつ、信念を持っている・・・ほんとうに信念を

持っている・・・信念を持っている・・・バカだ」と吐いた。

「それでは『平等エレベーター』の設置後の経過を報告させていただきます」鉄美清隆が言った。

今日は10月の第一月曜日、毎月行われている若手の意見交換会の日だった。

珍しく、役員が何人が出席していた。

「設置当日はやはり何件かの問い合わせと言うかクレームがありました。」

ボタンを押したのになかなかやって来ないどころか、来たと思ったら目の前を通過していった、また、降りる階に来たのに、エレベーターは無視して通り過ぎて行った、おかげで会社や学校に遅刻しそうになった等々です」

「結果、早く取り換えてくれということか？」役員の一人が鉄美に質問した。

「いえ、それが、岩田さんの事前説明が良かったというのか、住人のみなさんが呆れてしまったというのか・・・」

「呆れた？ それはいったいどういう意味だ？」同じ役員が再び鉄美に問いただした。

「いえ、今のは私の独り言でして、実は二日目からは目立った苦情等はほとんどなく、逆に効果と言うのか何と言いましようか、ある都道府県の小学校数校から『平等』の大切さをぜひ子供たちに教えたいということ。『平等エレベーター』の注文を頂きました」

「それマジか？」

原因不明の発疹がやっとおさまり久しぶりに出勤してきた営業部長が鉄美に聞いた。

「それどころか意外なというか、これは岩田さんが住まれているマンションの理事長からの報告なんですけど、みんなあまりエレベーターに乗らなくなって階段を利用するようになった。結果、住人の主に我々と同じサラリーマンの方々から、体重が減った、ウエスト

が細くなつたという声が届いているらしいんです。

岩田さんにそのことを伝えると『健全な肉体にこそ健全な平等心が宿る。文武両道、メタポさよならっ!!!』と言っておられまし・

「ばかやるーっ!!!」

怒鳴つたのは別の役員、又の名を代表取締役、そう、社長だつた。

「それは暗にエレベーターの存在を否定しているだけじゃないかっ!!!」

営業部長つ、一体どうなっているんだっ!!!」

「はっ、はい、誠に申し訳ございませんっ」営業部長は立ち上がる
と直立不動で答えた。

「その岩田という社員やらはどこにいるんだっ!!!」

「え、えーと、鉄美っ、岩田は今日はどこに行つたんだ?」

「気を良くして『平等エレベーター』の売り込みに行かつて言つて
ました」

「どこにだ?」額の汗をハンカチで拭きながら営業部長は鉄美に聞
いた。

「火のない所に煙は立たない。馬鹿と何とかは高いところが好き。
その腐った性根を我らが『平等エレベーター』が成敗してさしあげ
るぞ。マツケンサンバもいいけど暴れん坊將軍もよろしくっ、と言
つて出て行きましたよ。たぶん超高層マンションにでも行つたんじ
やないですか」

鉄美の話が終わると、営業部長は口から泡を吹いてその場に倒れ
こんでしまった。

「あなた、何を言っているんですか?」

貰った名刺にただ 担当 とだけ書かれている石井という男は口
をとがらせて幸三に言った。

「ですから只今ご説明申しあげましたように、当社の『平等エレベ
ーター』は日頃住人の皆様が不満に思っいらっしやる不平等につ

きまして何とかご解消をさせていただいた。」

「もういいですっ！」石井は声を荒げた。「岩田さん、もちろんご存知かと思えますけど、当トップ・オブ・ザ・タワー・イン・六本木は高額所得者の方ばかりがお住まいになつていらっしゃるんです。言つてみれば『勝ち組』の方ばかりなんです。そんな方々に今さら『平等』があーだこーだと言つてもみなさん聞く耳をお持ちになりませんよ。最上階の58階に住まれている方が、朝の出勤時にいくらボタンを押してもエレベーターが来てくれないんだ、何？『平等エレベーター』？ふんふん・・・あつ、それならしょうがない、じゃあ私は歩いて下まで行きます、つて誰が言うと思つんですか？」

「いえ、なかには、最上階とは申しませんが、例えば20階位にお住まいの方でしたら毎日階段を歩いて上り下りされて、結果、メタボ解消につながつた、そういった方が必ず現れる、そんな良い面での副作用がこの『平等エレベーター』には含まれておりまし・

「それなら初めからエレベーターなんか設置しなければいいんですよっ！！！」

石井が鼻をふくらませて幸三に言葉を吐きかけた時「石井君、お客様さまに対してそんな言い方は良くないんじゃないですか？」と一人の男が商談室に入つてきた。

幸三はその姿を見ると思わず「あっ！」と声を上げた。

男は、今や、時代の風雲児、又は、日本のビル・ゲイツ、と称され、お茶の間の話題を独占している広徳寺宗太郎（32）だった。

慶応大学を卒業後、コンピューターソフトの会社を立ち上げ、わずか3年の間に年商3兆円のガリバー会社に仕立て上げた、まさに怪物、だった。

「誠に申し訳ございません。石井は少し真面目すぎるころがありまして・・・」広徳寺は軽く一礼すると「で、今日はどのような御用件で？」とマダムキラールと呼ばれて久しい流し目を幸三に向けた。

「いえ、実は・・・」

幸三の『平等エレベーター』の話に初めは少し苦笑いを浮かべて聞いていた広徳寺だったが、その表情はだんだんと真剣な顔つきになっていった。

「おもしろいよっ!!」

突然、広徳寺は大きな声を上げた。

「岩田さん、是非、当マンションにその『平等エレベーター』を設置願いますっ！」

広徳寺が立ちあがって幸三に握手を求めようとしたとき石井が「社長っ！マジっすかっ！」と二人の間に割って入った。

「石井、お前心配性なんだよ。ダメならまた元に戻せばいいじゃないか。」

初めの設置は無償でやっていただけなんですよね？」広徳寺は幸三に聞いた。

「もちろんです。」

住人の方の評判が悪ければすぐに元に戻しますので。ご心配なく」石井はしょうがないなあという顔を見ると「じゃあ、契約書にサインするから、書類見せてくれる」と言っって幸三の顔を睨み、まあ、そう怒るなよと広徳寺から肩をポンポンと二度たたかれた。

幸三がトップ・オブ・ザ・タワー・イン・六本木と『平等エレベーター』の契約を結んだ3週間後、東西エレベーターの営業部の電話は朝から一日中鳴りっぱなしだった。

前日の夜、毎週夜8時からある民放で放映されているバラエティ番組「経済学そこが知りたいINニッポン」の中で、毎週レギュラー出演している広徳寺が『平等エレベーター』について語ってしまったのだ。

今や、日本の誰よりも、もちろん総理大臣よりも影響力のある、まさしく神の声、広徳寺の発言に日本中は湧きだった。

「おもしろい」に日本全国の商業施設から、客寄せとしての『平等エレベーター』に問い合わせが殺到し「案外、これは直接の効果で

はなくて、何と言ったらいいのか副産物っていうのか、体にもいいんですよね」に日本中のオフィスとマンションを管理しているビルメンテナンス会社から同じく問い合わせが殺到した。

実際のところ、トップ・オブ・ザ・タワー・イン・六本木での評判は苦情8割高評価1割、無視1割だった。

高評価1割の中にはさすが58階建とあって設置後2週間で体重が5kg、ウエストが8センチも細くなった住人もいたが、広徳寺は秘密裏に東西エレベーターに『平等エレベーター』の撤去を申し出ていた。

しかし、とにもかくにも『平等エレベーター』は売れに売れた。

幸三の名刺には“平等エレベーター推進事業部 技術部マネージャー”という肩書が刻印され、取締役社長はわけもなく一線を退き会長職につき、部長は入院していた病院のベットのうえで退職を決意した。

『平等エレベーター』が日本を席捲して暫く立ったある日、幸三はテレビに出演する機会を得た。

毎週日曜日の夜8時からNHKで放映されている“あの時、企業は動いた、サクセス IN 日本”に『時代の顔』として呼ばれたのだった。

「岩田さん」新人アナウンサーが作り笑いを幸三に向けた。「やはり、平等に対するご信念をお持ちになられたからこのお仕事成し遂げることができたと考えていいのでしょうか？」

「ええ、そうだと思います。」

信念、怨念、おーこわい。ついでに珍念、木念、一休さ〜ん」

スタジオが凍りついた。

「カットっ！！」

ディレクターが大声を張り上げ幸三に駆け寄ってきた。

「岩田さん、申し訳ないですが、あまりご質問内容と関係のないことを話すのはご勘弁願えますか」

収録が再び始まった。

ディレクターはわずか30分の収録が2時間にも3時間にも感じた。

「お疲れ様でしたーっ」

大きく声を張り上げた時、ディレクターは自分の手のひらが汗でくちゆくちゆになっているのに気付いた。

幸三はプロデューサーと夜の街に繰り出すべくエレベーターに乗り込んだ。

“東西エレベーター”という文字が階表示盤の上に掲げられていて、その隣に『平等エレベーター』を示す“平”の字を で囲んだマークが添えられていた。

「いやあ、大変貴重な話を頂きました」と言っつて額の汗を拭いながら『1』階のボタンをプロデューサーが押した。

ゆつくりと『平等エレベーター』は下降を始める。

「こちらでもご採用いただきまして」幸三はプロデューサーに頭を下げる。

「いえいえ」とプロデューサーが恐縮して頭を掻いた時、突然、エレベーターが大きく揺れた。

「地震ですっ！」

どれくらい揺れただろうか？

意識を取り戻すと幸三はエレベーターの床に横たわっていた。

立ち上がるうとしたが腰から下に全く力が入らない。

足がちぎれてしまったのかと視線を向けると、ちゃんと足は2本ともついていた。

「うーっ」と呻き声のするほうを見るとプロデューサーが血まみれになって倒れていた。

エレベーターの天井がもろに額に突き刺さっていた。

ぐらっ、再びエレベーターが大きく揺れた。

落ちてくるエレベーターの天板のかけらを何とか避けきると、見えてはいけない夜空が見えた。

幸三は上半身を起こし必死になって『開』のボタンを押そうとするが手が届かない。

相変わらず腰から下には全く力が入らない。

と、突然エレベーターが上昇を始めた。

「どうしてだっ!？」幸三が声を上げる。「先に下るボタンを押したのは俺たちじゃないかっ!！」

夜空がだんだんと近づいてくる。

どこかで火の手が上がったのか白い煙が、夜空と幸三の瞳の間に割って入った。

エレベーターが止まった。

若い男が二人乗り込んできて「食堂から火が出たらしいぞ」と上ずった声を吐いた。

男達は『1』階のボタンを押した。

エレベーターはゆっくりと下降を始めた。

夜空が遠のいていく。

1階にエレベーターが着いた。

男達は幸三と、とうとう声も出さず動かなくなったプロデューサーを残して逃げるようにと言うかまさに逃げているのだが、エレベーターから出て行った。

エレベーターは扉を閉めるとすぐに上昇を始めた。

幸三は必死になって手を伸ばすがどうしてもボタンに手が届かない。

夜空が再び近づいてくる。

幸三の瞳と夜空の間に赤い炎が混ざり始めた

エレベーターが止まった。

男が一人乗りこんできた。

ディレクターだった。

「すまないが、腰を痛めたみたいなので、1階に着いたらここか

ら引きずり出してもらえないか」幸三は懇願の目をディレクターに向けた。

「平等なんです」ポツリとディレクターは吐いた。「プロデューサーもあなたも私も」

平等に生きる、平等に扱われる権利が我々にはあるんです」

エレベーターが1階に着いた。

「お互いに信念を持って生きていきましょう」

そう言い残すとディレクターはエレベーターを降りていった。

再びエレベーターが上昇を始めた。

夜空との距離がどんどんと近くなる。

プロデューサーの額から流れ出る血はますます勢いを増す。

「平等ってなんだーっ!!!」幸三は叫んだ。「なんだーっ!!!」

「なんだ、パンダ、カメラだ、土井 だっっ!!!」

合掌。

了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4154f/>

平等エレベーター

2011年10月4日14時25分発行